



曲屋全景。母屋には蚕の飼育に使った越屋根が残っている

柱や梁などに懐かしさを感じると思います。約20年間、曲屋を守ってきた曲屋管理組合組合長の鈴木圭子さんは「歴史を肌で感じ、いろいろな思いを膨らませてほしい」と話します。

一方、南郷地区は高齢化が進み、曲屋の後継者不足が課題となっている中、今年1月、地域おこし協力隊として東京都板橋区から古川実加さんが移住。誘客や周辺地域の活性化に協力しています。「曲屋の一員として魅力を伝え、人と地域の温かさを伝えていきたい」と意気込みます。

今年約20年ぶりに、屋根の改修作業を行う予定で、傷んだ表面部分を張り替えます。鈴木さんは「この地域の文化と歴史を伝え続け、古民家のある里山風景を後世に残せたら」と笑顔で浮かべます。

▶20年間守ってきた曲屋を振り返ると同時に、古川さんなど若い人に地域の伝統を引き継いでほしいと胸の内を語る鈴木さん



▼室内から見たかやぶき屋根。竹で骨格を作り、屋根の形に沿ってかやを覆っていく



▲稲の収穫を感謝し、翌年の豊穡を祈って稲刈り後のわらを束ねたわら鉄砲で「十日夜」と呼ぶ。子どもたちが作物にいたずらをするモグラを追い払うために使ったといわれている



▲敷地内には4つの蔵があり、外壁はしっくいと土を混ぜて塗り固められている。農具や民具などを展示

▶オクノデイに飾られた掛け軸などは、当時、鈴木家と交流のあった文人から贈られたといわれる

